

二万数千年前の動物の足跡が発見された

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



京都市動物園で見つかった二万五千年前の足跡

足跡の発見

大地に点々と刻まれた小さな凹み。よく見ると、ある規則性をもって分布していることがわかる。写真の左下手前から右上奥にむかって、ジグザグに連なる4個の凹み。おのおの間隔、左右へのばらつきは美しく整っている。誰がみても一目瞭然、足跡である。軟弱な地面に歩を進めれば、人でも動物でも、みずからの足形を大地に記

すことができる。アスファルトやコンクリートの上での生活がほとんどの現代でも、足跡は私たちの身のまわりに満ちている。

でも、写真の足跡はそれが今から二万数千年前にしるされたものと聞かされれば誰でも驚くだろう。

1989年4月から6月にかけて行なわれた左京区岡崎の京都市動物園内の埋蔵文化財発掘調査で、今から二万数千年前の動物の足跡群

が発見された。地質年代でいえば、第四紀更新世(氷河時代)の最終氷期。考古学の年代でいえば、後期旧石器時代にあたる。私たちの祖先はすでに、石を打ち欠き鋭利な刃物を作り出す技術を獲得しているものの、土器の発明はまだずっと先のこと。現在の地表から地下約2.5m、そんな時代の動物の足跡が発見された。

足跡の主

二万数千年前、みずからの痕跡を大地に刻み、私たちにその存在を誇示する大昔の動物の正体は、いったい何なのだろう。

掘り出された15個の足跡のうち多くのもが、前足の足跡に後足の足跡がかさなった状態でみつかった。身近にいる犬や猫などの四つ足で歩く動物を観察すると、自然な状態で歩いている時には、右（左）前足が踏んだ地面と同じ場所に右（左）後足が運ばれているのがわかる。つまり、発掘された足跡の特徴から、四足歩行動物が、走ったり立ち止まったりせずに自然な状態で歩行してゆく様子が観察されたのである。前足（後足）同士の歩幅は90cmから100cm、個別の足跡の大きさは縦方向で10cm前後から14cmにおよぶものがあり、かなり大型の動物であることがわかった。彼らの身長は、おそらく私たちの背丈を越えていただろう。

個々の足跡の形を観察すると、どれもが楕円形のふたつにわかれた蹄を持っている。このような蹄の形をした一群の動物は、偶蹄類ぐうていれいとよばれる鹿や牛の仲間であるという。偶蹄類は人間でいう踵かかとの上の部分に副蹄とよばれる小さなふたつの蹄をもっている。発掘された足跡のなかには、この副蹄の部分まで明瞭にしるされているものもあった。

総合すると、発掘された足跡の主は大型の鹿や牛の類だということになる。これに該当するこの時期の動物に、ヤベオオツノシカ・ヘラシカなどが化石として知られ

ているが、特定はできない。無論、現在の日本にはこのような動物は生息していない。

年代の決めて

なぜ、足跡が今から二万数千年前にしるされたものかということかわかったのだろうか。

足跡は、現代の地表面下約2.5mに検出される火山灰層の、すぐ上に薄くたまった植物の腐植土層の上面で発見された。火山灰層は火山が噴火した時に広い地域に同時に堆積するため、異なった地域の地層の年代を比較するときにはたいへん便利である。この火山灰は始良Tn火山灰と呼ばれているもので、かつて鹿児島あいの錦江湾きんこうわんに存在した始良火山が二万数千年前にひきおこした大噴火の折に、遠く京都にまで飛来したことが科学分析の結果明らかにされている。足跡がしるされた地面の年代で、足跡自体の年代を知ることができたのである。

足跡の周辺

足跡の周りには樹木の根の痕跡がいくつか見つかっていて、当時は森林だったことがわかる。また堆積の様子から、周辺は水辺に近い湿地だったことがうかがわれる。当時は多くの動物が行きかい、息づいていたことだろう。軟弱な地面に歩を進めれば、誰でもみずからの痕跡を大地にしるすことができる。当時の日本にはさまざまな動物が生息していた。ナウマンゾウもその一員だし、そしてわが人類も。左京区岡崎一帯の地下には、彼らの生きた証がまだ眠っているのかもしれない。



地層の断面

最下部の黒い層の上に白っぽく見えるのが、始良Tn火山灰層。その上の薄く黒い腐植土層の上面から足跡が発見された。壁の上端から火山灰層までは約2mにわたって、河川が運んだ砂の層が縞模様縞模様に観察される。壁の上端は弥生時代以降の遺構が検出される面。